

ミシェル・セールにおける混合体の展開 —連続性の問題を中心として

縣 由衣子

Développement de la notion de <corps mêlés> dans la philosophie de Michel Serres ——Sur l'importance de la problématique de corps continu

Le but du présent article est de mettre en lumière la notion de <corps mêlés> introduite par Michel Serres dans *Les Cinq Sens* en éclairant le contexte philosophique supposé de cette notion. A première vue, il apparaît que cette notion est purement ordinaire dans la philosophie serrienne, mais nous verrons qu'elle s'y organise en réalité autour des deux points suivants. L'un est le problème de corps continu, l'autre est l'histoire philosophique, négligée par les études existantes, de la notion de mixité. Ce que Serres ambitionne avec la présentation de la notion de corps continu est de rejoindre l'opposition entre la continuité et le discret. Aristote, puis Leibniz et Bergson se sont affrontés autour de ce grand paradoxe philosophique, mais Serres essaye quant à lui de trouver le point de transaction dans notre corps, représenté par la notion de <corps mêlés>. Dans un deuxième temps, nous suivons l'histoire philosophique de la notion de mixité dans laquelle Serres inscrit Bergson et lui-même. Initiée par Aristote, puis reprise par Duhem, nous montrons qu'il existe une discussion philosophique peu remarquée à ce sujet. Finalement, le présent article montre ainsi que la notion de <corps mêlés> est un corps continu qui rejoint l'opposition entre la continuité et le discret, l'espace et le temps, incarné par le corps dans la pensée serrienne.

序論

本論の目的は、1980年代以降のセールの思想における混合体 *corps mêlés* という概念の哲学的な文脈を理解することにある。セールの著作の中でも代表的なものとみなされることの多い著作は主に、1960年代から1970年代の終わりに書かれている。この時代のセールの思想的業績は、一般的に、数学的構造概念や情報理論、あるいはサイバネティクスといった共時的な科学理論をいち早く思想の領域に導入したことにある。極めて学術的な著述を中心としたこれらの時代から一転して、1980年代以降になると、セールの著作の構成は、より一般の読者に開かれたものへと変化する。それと同時に、その思想は独自のものへと先鋭化され、その傾向は今日に到るまで続いている。このことが返って、セールの思想を哲学史的な文脈で捉えることを難しくしてきたことは、しばしば先行研究でも指摘されている¹。とはいえ、それと同時に、当時の最新の科学理論と少し距離をおき、セールの思想を独自のものとして理解するためには、この1980年代を待たなければならないようにもまた思われる。本論が注目するのは、ま

さにその思想の最大の転換点の一つである 1980 年代にセールが提唱するようになった、混合体という概念である。混合体 corps mêlés あるいは混合 mélange という概念は、一見すると哲学史においてこれまで共有されてきた諸主題とは無関係に見え、セールが独自に作り出したもののように見えるかもしれない。これに対し、本論では、この概念の背後には、前提とされる哲学史における議論が明確に存在していることを指摘する。したがって、本論の目的は、混合体の概念を理解することを最終目標としつつ、その上で、この概念が何に対する批判として提示されているものであるのか、またどのような哲学的文脈を前提としているのかを明らかにすることにある²。

とはいえ、セールは自身の思想における特定の概念が抽象的な哲学的タームとして扱われることを好まず、特異な用語を用いる一方で、それを明確に定義することを意図的に避けている。したがって、本論文においても、セールの概念のみを取り上げて抽象的に論じるというよりは、セールがこの概念に言及する文脈に沿って分析を行っていくことにしたい。この混合体あるいは混合という言葉がセールの著作に現れ始めるのは 1980 年代に入って刊行された『パラジット』『生成』などの Grasset 社から出版された著作においてである。本論では、その中でもまさに「混合体の哲学」という副題を題された 1985 年の『五感』を対象を絞ってこの概念の分析を進めることにする。

『五感』は一般的には視覚中心主義を批判し、皮膚論を中心とした五感の再構成によって感覚の復権を試みる感覚論として紹介されることが多い。また、副題に冠せられた混合体というタームをめぐる問題は先行研究においてもほとんど言及されることがなく、あるいはセール独自の概念として理解されるというよりは、ほとんど詩的比喩か文体の問題として扱われることが多い。しかし、実際に深く読み込んでいくと、セールの『五感』には、混合体という一つの新たなモデル的な概念を提示し、その概念によって従来の身体と感覚の概念を構成し直すという試みがあることが理解されてくる。言い換えると、セールは混合体、つまり、混ぜ合わされたものというこれまで哲学史においてほとんど扱われてこなかったものを哲学的主題として取り上げ、この概念によって身体と感覚の新たな捉え方を提示しようとしていると言える。

この仮説のもと、本論は混合体を一つのモデル的な概念として捉えるために、その前提となっている思想的な文脈を探ることを目的としている。その上で、本論では、以下の手順で論を進めることにする。まず初めに、セールの思想の中における混合体の概念を、初期の著作、中でも『ヘルメス』で形づくられる理論的枠組みに位置付ける。さらに、『五感』における以下の二つの観点から混合体の概念的背景を検討する。一つは位相幾何学的な文脈であり、セールはこの観点に立脚することで哲学における連続体の問題をめぐる議論に新たな解決の糸口を与えようとしていると言える。不連続的なものからいかにして連続的なものが生まれるのか、というギリシャのゼノン以来問われてきた問いを、セールは転倒させようとする。この問いにおいて前提とされるべきは、連続体なのであって、不連続的なものはむしろ連続体から遡及的に把持されるとセールは考えるのである。この時、セールが依拠するのは、身体である。身体は所与の連続体の最も良い例として取り上げられている。また、もう一つの文脈としてあげられるのは、セールが混合体の概念を論じる際に言及している哲学における、混合の概念の変遷である。これまで哲学においてあまり論じられてこなかった混合の概念であるが、その中でもセー

ルはアリストテレス、デュエム、ベルクソンにおいて展開されている混合の議論を取り上げ、その概念史の中に自らを位置付けようとする。この時、混合体は空間的で時間的な概念として理解されるのである。結論を先取りして述べてしまうと、セールは混合体の概念において、位相論や流体論を導入することで近代的な空間と時間とを連続的な多様体として統一的に理解しようとしている。そして、そのような概念的合流の一つの現れとして私たちが生きる身体を捉えようとしている、と考えられるのである。

1. セール思想における混合体概念の位置付け

混合体の概念を明らかにする上で、まずこの概念のセールの初期の思想における位置を確認しておきたい。端的に言えば、セールの思想においては、コミュニケーションの成立の必要条件として、第三項排除があるとされる。コミュニケーションはそれを妨害する第三者／第三項を、参加者が共闘して追放することによって成立する、とセールは指摘する。しかし、その一方で、混合体という概念によって、その排除されるべき第三項はあらかじめ私たちに身体や感覚として逃れ難く含み込まれている、ということが指摘されるのである。

1969年から1980年に至る『ヘルメス』に収録された論考は、エピステモロジーの領域から、これまでの科学史・科学哲学に批判的な立場に立脚して執筆された。そこでは、科学的な知を超越的な立場から論じることの不可能性が指摘されていた。それと同時に、現代科学の内部で生じている状況とは、コントが想定したような学問の諸領域が独立した分野を構成している状態ではもはやないということがセールによって指摘されている。現代科学は、今やその諸領域が複数の原理を相互的に翻訳し導入し合うことによって、ライプニッツがかつて科学の全体像の本性に関して述べたような「大洋のごとき連続体 *un corps continu comme un océan*」をなしているとされているのである³。このことによって、何かしらの原理を不動の準拠点として据えて科学の諸分野を分類しようとするこれまでのエピステモロジーが試みてきた方法論は、今や無意味となったことが示されるのである。以前は数学が占めていた不動の科学の女王としての位置は、「大洋」のように領域間の隔壁を失った連続体となった現代科学の中にはもはやない。あるのは、複数の原理⁴を科学の諸領域が相互にコミュニケーションを行うことを通じて伝達し、翻訳し合うネットワーク的状况である。エピステモロジーは科学の外部から科学を観察する超越的な視点に自らを位置付けてきたが、そのような立場はもはやこのような状況下には許容されないことになる。現代科学が構成するこのネットワークを観察しようとする者は、ネットワークの内部に介入し、ネットワークに干渉しながら、ネットワーク内部のなんらかの限定的なパースペクティブに準拠してそれを観察するしかない。

言い換えると、エピステモロジーの領域を出発点とするこのモデルは、絶対的で超越的な準拠点なしにこの相互的に準拠しあうことで形成され、なんらかの媒介物の仲介によるコミュニケーション、翻訳、輸送といった関係を取り結ぶネットワークモデルを想定する。そして、重要なことは、セールが人間同士が相互にコミュニケーションを行うことで形成されるネットワークにこのネットワークモデルを適用しようとしている点である。一般的には人間間でのみ

特権的になされるものとして考えられてきたコミュニケーションなどの関係性のネットワークは、セールにおいては人間間でのみなされるものではなく、人間ともの、ものとの、あるいは集団ともの、といった関係においても見出されうるものとなるのである。この理論は、このように関係のネットワークを人間間になされるものとして限定せず、ものをもその関係項に含めうるという点において注目され、後年社会学、文化人類学においてアクターネットワーク理論として応用、発展を見ることになったと言える。

つまり、コミュニケーション概念もまた、人間間のみならず物体間、集団間で行われるものとしてより一般化されるのである。したがって、セールにおいては、コミュニケーションの主体が人間に特権的に与えられることはもはやない。むしろ、ライプニッツの影響のもと、コミュニケーションによるネットワークの最も一般的な構成員はモナドに取って代わられるのである。

このような哲学モデルには、ライプニッツの極めて強い影響が見て取れるのは確かである。しかしセールの思想の独自性は、その極めて初期の段階から、このネットワークとコミュニケーションの問題にそれを妨害するものの存在を不可避のものとして組み込んでいたことにあることも指摘しておかなくてはならない。それは、本節の冒頭に述べたように第三項排除という主題としてセールの思想の中に現れている。

例えば、セールは、成功したコミュニケーションとは、常にコミュニケーションの参加者の共闘によって、それを妨害する第三者を追放しようとすることによって成立するとしている。このことが最初期に論じられているのは『コミュニケーション』に収録された1966年初出の論文である「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的生成」である。セールは、初出時は「第三者、あるいは第三項排除」と題されていたこの論文で、記号として概念的に扱われているものを具体的な対話の中であらためて捉え直そうとする際に、不可避的にノイズが出来ること、あまりにも無視されてきた、ということ指摘している。コミュニケーションには常にバックグラウンドノイズ、あるいは言い間違い、吃り、あるいは通信のエラーなどが含まれている。しかしこのことはこれまで看過されるか、あるいは病理学的な症例として扱われるにとどまってきた、とセールは述べる。この時、セールは、これらのノイズをなかったものとする論理学の立場でも、これらのノイズを病理的対象として捉え、その治療と改善を図ろうとする立場でもない、第三の立場を取ろうと試みる。それはすなわち、この妨害物の存在とコミュニケーションの成立そのもの自体が根源的に不可避的に一体のものであるとする立場である。その結果、すでに前述したように、セールにおいては、コミュニケーションは、その参加者による共闘の結果、この妨害物の排除に成功することによって成り立つとされることになるのである。本論では、この図式をセールにならって第三項排除 (tiers exclu/ 排除された第三者 / 排中律) と呼ぶことにする。

ライプニッツの思想との最も根源的な相違点は、この第三項排除にある。セールによれば、ライプニッツの思想は「ノイズが想定されない音楽」である。モナド間のコミュニケーションは神によってあらかじめ成立するように調和が予定され、そこには失敗に終わるコミュニケーションや大きすぎるバックグラウンドノイズの存在は理論上想定されていない。これに対して、セールにおけるコミュニケーションは常につきまとうノイズを排除していくことによって成り

立つ。したがって、前述した媒介物によってコミュニケーションし、翻訳しあい、輸送を行うネットワークというセールのモデルは実際のところ現実に存在する「雑音の海に沈んで」⁵いて、そこから漸次的に妨害物を排除していくことによって形成されるのである。

しかし、このように述べる一方で、セールは数学的な抽象性が依然として存在していることはけっして否定しない。セールの思想には、経験されるものの目の眩むような豊かさと、数学的な抽象性の奇跡とが共存している。言い換えれば、セールにおいては、抽象的な概念と経験的な雑音とがコミュニケーションと排除という運動を通して不可避的に接続している。排除という構造が介在することによって、概念と経験とは連続的なものとなるのが許されない。そこには観念主義と経験主義のねじれた接続があるのである。

そして、実際のところ、私たちは観念論的立場から見れば雑音としか見えないもの、すなわちコミュニケーションにおける第三項として排除されるものを不可避的に内包している。それらは、身体、あるいは感覚といったかたちで哲学の文脈では概念化されてきた。しかし、魂の対立項として身体が概念化され、悟性を定義するために感覚が概念化されるといったように、その定義は常に、なんらかの対立項との二項対立の中で消極的になされてきた。セールは、このような二項対立による顕在化が行われる以前の状態を指し示すため、このような非顕在的な状態のもののみを混合 *mélange*、あるいは混合体 *corps mêlés* を提示しているのではないか、というのが本論の仮説である。

2. 位相論の導入

実際のところ、これはセールによる意図的なものなのだが、『五感』では論考の対象が限定的に定義されるところか、一つの議論の流れに他の議論が流れ込み、一つの結節点をなすかと思えば、さらにその結節点を起点に別の議論が流れ込む、という特異な構成で展開されている。多くの議論を捨象してしまうことを覚悟の上で、『五感』におけるセールの意図の一つの流れを端的に述べるとすると、それは混合体という新しい概念を描くこと、そしてその概念によって身体と感覚の概念を再構成することにある。

一般的に『五感』は視覚論批判であり皮膚論を含む感覚主義の復興を目的とするものとして紹介されることが多い。これに対し、本論が指摘したいのは、本書の重要な主題は、本書の副題ともなっている「混合体の哲学」そのものにあるのであって、その意図はこの新しい概念によってこれまでの哲学が自身の合理主義的な姿勢、あるいは認識論的な方法によって対象とできてこなかったものをすくい取ることにある。その時、この新しい概念の根拠となるのは、神話であり、芸術であり、あるいは位相論を始めとする共時的な理論の発展なのであるが、何より私たちの身体とその感覚である。つまり、議論は相互包摂的な構造をなしているのであって、混合体の概念は身体に依拠して構成されるのと同時に、混合体の概念に依拠して身体が理解される。そうは言っても混合体がすなわち身体とその感覚そのものをさしているのではないことに注目しておかなくてはならない。

とはいえ、セールは繰り返し、身体と感覚に対して論じることの不可能性に言及する。とい

うのも、言語はそれ自体が身体及び感覚と不可避的な関係を取り結んでいるものである以上、超越的な第三者として、言語が感覚及び身体に言及することは不可能だからである。この議論については、また別のところで論じたい⁶。

翻って、セールにおける混合体の概念及び身体を理解しようとする上で、一つの手がかりとなるのは、織物の比喩である。特に『五感』の第1章「ヴェール」では、近代合理主義的な空間論が優位を占めてきたことに対し、セールは皮膚論を中心として、位相論的な薄膜のモチーフ、あるいは複雑に織り上げられた織物のモチーフを提示する。セールはクリュニー美術館の6枚綴りのタペストリー「一角獣と貴婦人」を取り上げ、高度に織り上げられた結び目として身体を捉えようとする。この結び目のモチーフは、『ヘルメス』でのコミュニケーションと交換の網の目が構成するネットワークにおけるインターチェンジとしてのモノド、あるいは主体を論じる文脈ですでに取り上げられていた。モノドは複数の流れ、あるいは複数のネットワークが流れ込む結節点であることが、『ヘルメス』においては強調されていた。これを裏打ちするさらに詳細な議論を『五感』にも見ることができる。セールはまず、ベルクソンが『意識に直接与えられたものに関する試論』において区別した二つの多様体に言及する⁷。ベルクソンは不連続で離散的な多様体と連続的な多様体とを区別し、前者を空間的なものとし、後者を時間的なものとした。そしてまた前者を知性の側、そして科学の側に位置付けると同時に、後者を直観の側、哲学の側へ位置付けた。セールはこれを「フランス語でものを書いた最後の思想家の一人」であるベルクソンが「解決するべく後進に残した課題の一つ」としながらも、この二つの多様体のそのものの区分に異議を唱える。

この異議の根拠となっているのは位相幾何学のモデルである。つまり、不連続で離散的な多様体のみが空間的なものだというベルクソンの前提こそが、位相論の登場によって覆るのであり、連続的な空間について考えることを可能にすることをセールは指摘する。したがって、彼の試みはまず空間的で連続的なものとして身体を考えることだということができる。この時、セールが「一角獣と貴婦人」のタペストリーの比喩から論じようとしているのは、「連続体の迷宮」として哲学的に論じられて来た主題なのではないか、と考えられる。この問題は、もともと瞬間的なものから、いかにして運動が生じると考えられるのか、という、アリストテレスが『自然学』において「ゼノンのパラドックス」と呼んだ問いに端を発している。ライプニッツは、この問いを継承し取り組む際に、この問題を不連続なものからいかにして連続的なものが生じるのか、という形で一般化し、例えば、不連続的な点からいかにして直線が成り立つのか、という幾何学的な問題として論じていた。この時、ライプニッツにおいてすでに示唆されていたのは、この問題は不連続性と連続性の間の飛躍をどのように解決するのかを問うているということである。そして、ライプニッツはこの問題をさらに大きな問いへと拡大させてもいる。それは、理論的に想定される極限としての点や瞬間、あるいはモノドといった概念と、実際に私たちが感覚によって捉えうる直線や持続的な時間、あるいは身体や物体との間の飛躍をどのように説明しうるのか、という問いである⁸。これに対し、セールは、このライプニッツの試みを継承しつつ、20世紀の初頭に幾何学において理論的發展がなされ、また数学における集合論に應用されていた位相論的モデルを導入することによって、この飛躍の橋渡しを試みようとしているように思われる。

稠密な連続体 *accumulation dense* を考えるために無限なものに突き進んだり、あるいは時間に助けを求めたりする前に、挿入 *insertion* の状況あるいは中間 *milieu* の状況に立ち戻って考えるのが適切である。実際、連続的な段階のどこかで、第三のものは二つの先住者の中間に場を占めたのだ。(…) 実際、この問題が取りあげ直される度ごとに、新しい粒子を挿入する状況の選択は、異なった次元でされうる。お針子の女性も、糸を紡ぐ女性も、編み物をする女性も、機織をする女性も、全ての女性がこのことを知っている。時には上から、時には下から、糸を編むのである。このようにして作られたいかなる経路もまっすぐには走ることはない。いかなる経路も同じ次元にとどまることはなく、全ては歪められ、よじられる。(…) しばしば厳密性と混同されてきた測量幾何法及びその硬直性は姿を消し、区別 *distinction* は距離 *distance* とは異なるものとされ、ここからあちらへの経路の数は抗いがたく増大し、様々な経路が重なり合う。高次の自由度を身につけた身体 *corps* は、位相論が私たちにこのことを教える以前から、あるいは木でできた自動人形の厳密さ以外の厳密さを私たちが学ぶ以前から常にこうした状況を生きているのだ⁹。

ここで問題となっているのは、不連続的で離散的な多様体としての身体であって、合理主義的な延長から想起されるような均質的で稠密な連続体ではない。不連続的な多様体を微分化し点と点とを分割しようとする極限的な状況を思考しようとするやいなや、その点と点との「間」が生じることをセールは指摘する。その「間」の隔たりがある以上「たとえそれがどんな小さな隔たりであろうとも、最初の二つの要素あるいは点の間に第三のものを挿入することが可能になる」のである。だとすれば、そこにあるのはむしろ最小の点であるどころか点と点の間にあらゆる次元から第三のものが挿入されていくことによって織り上げられる結び目なのではないか、というのがセールの論点であり、さらにいえば、私たちが生きている身体こそがそれを体現していることが示唆されるのである。ここには、二者が識別されるさいには第三者の問題がつねに生じるということを主張してきたセールの第三項排除の問題との関連を見て取ることもできる。

時間あるいは無限が不連続なものと連続的なものを分かつ前に、結び目がこの二つを結び合わせる。この接続の実践とその概念は、その他の多くのものに先立っており、不可欠なものである¹⁰。

こうしてセールは、この位相論的に取り出された結び目を、測量幾何法における最小単位である点に取って代わる、根源的なものとして提示する。それはベルクソンの連続性と不連続性を結びつけるのと同時に、身体を哲学において新たな方向へと開いていくことを可能にする。とはいえ、極めて位相論的なこの議論を踏まえながらも、『五感』における混合体とそれによって語られる身体は、位相幾何学の応用に終わるものではないことも指摘しておきたい。『五感』における混合体をめぐる議論には位相論的なものに混合の概念をめぐる哲学史の流れが合流し

ているのである。まず、以下の引用から、セールの混合体の概念が、結び目であると同時に諸要素が混ざりあったものであることが理解される。重要なので長く引用しておきたい。

滑らかなあるいはしわくちゃの布が、唇のように開かれた部分を通して別の布の上あるいは下に入り込むことがあるし、その他様々の状況がありうる。このような状況は分析の限界を示している。不連続な多様体においては、区分することは常に可能であるように見え、必要なのは忍耐力だけであるように思われる。不連続な粒子あるいは要素個々の状況、その状況を描き出している複雑な道筋は考慮されない。それらはあまりにも繊細であり、あまりにも軽やかなので、知覚され得ないかのようだからだ。連続された多様体においては、こうした道筋が力を持つ。ベルクソンは砂糖が自然に水に溶けるのを待つようにと求めた。彼は、こうして形成された混合が分離するのを待つことは決して求めなかったのである。分離が終わるまでには読者たちは果てし無く待たねばならないだろう。混合は容易には分解されないからだ。(…)私とその水を飲むことを欲するなら、私は同じく砂糖も飲むことを我慢しなくてはならないし、もし砂糖が欲しければ水も飲み干さねばならない。(…)砂糖と水は一つの結び目によって結び付けられているかのように見えるが、その結び目を私たちがいつでも解くことができるというわけではない。「分析する analyser」という語は、まさしく「解く」を意味するギリシャの動詞に習ったものであることは誰もが知っているだろう。分析するためには結び目を解くことが要求される。ところが私たちは分解するためには切断しか必要ではないと思っている¹¹。

ここに前述の連続と不連続の多様体の対立の幾何学的な議論から、化学的な問題へと論点が変わったことが理解される。後述するが、結び目をベルクソンにおける砂糖と水の問題へと読み替えることによって、セールは混合をめぐる哲学史的な議論へと混合体の概念を組み込もうとしているのではないかと思われる。

また、セールは結び目のモデルを認識論に対する批判的な立場を示すためにも用いていることがここからは理解される。結び目は認識論的な分析の限界を示すのと同時に、極限まで分析を行う認識論的な立場に対するセールの立場を示す。つまり、復元不可能なほどに分析し尽くすのではなく、結んでほどくという可逆的な立場である。

細い紐や太い紐、柔らかい紐や固い紐によって結び付けられ、繋がれた諸々の多様体のみが存在しており、それらは分析によってたやすく解かれたり、あるいはなかなか解かれなかったりする結び目である。混合 *mélange* という概念は中間 *milieu* という概念よりもこの状況をよく言い表している。そして固いものよりヴェールの方が、視覚よりも皮膚の方が、言語よりも身体の方が、この状況をよりよく表現している¹²。

セールにおいては、現実存在しているものは糸が絡み合って結合された多様体であり、したがって、『五感』の試みは、いわばこのような現実の状況をどのように理解するか、という哲学的な観察の下で混合体という観念を提示するものとして理解される。また、身体を混合体と

いう概念モデルの現れとして示していることが見て取ることができるように思われる。

さらに続く節においては、この概念の哲学史的な位置付けを明らかにすると同時に、この混合体の概念が本節で示された空間的な側面にとどまるものではなく時間的な側面をも含んでいることを示すことを試みる。

3.1. 混合の概念史

皮膚論を中心に展開された第1章から一転して、第3章では、混合物を介した集団もしくは共同体と身体の間わりが論じられるのだが¹³、その中でも混合体に関する議論の箇所を中心に、その展開を確認することにする。ここで、注目しておきたいのは、セールが混合の概念に関して、デュエムの名をあげ以下のように述べている点である。

ベルクソンはデュエムの後を受けて、ギリシャ人の取水口が複数ある水時計、可変式の水瓶、底の通じ合った壺の改良作を考案しようとしたのだった。まさしく、もしくは巧妙にも、彼は混合を実践していたのだ¹⁴。

セールが繰り返し認識論とデカルト的合理主義が混合体的な対象を看過してきたことを指摘していることから明らかなように、混合体もしくは混合の問題について積極的に言及している思想家の数は多くない。この概念についての議論が最も活発になされたのは、セールが言及しているようにギリシャ哲学においてであり、その展開は、原子論者たちに端を発し、アリストテレスにおいて一応の結実を見る。特に本論では、アリストテレスにおける混合の議論を取り上げ、その問題提起がどのようなものかを確認する。次に、セールがここで名をあげたデュエムは、その著書の中で、混合を哲学的に論じるために歴史的な経緯を説明しているが、その議論はアリストテレスのあと、17世紀の化学と物理の歴史へと接続されている。その飛躍を混合の概念をめぐる事実上の長い断絶と見るべきか、あるいは、混合の問題はアリストテレス以降も別の問題系のもとで別の概念を用いて論じられていたと考えるべきかは、また別の機会に詳しく検討したい¹⁵。とはいえ、重要なことは、セールが、デュエムが自らをアリストテレスに続くものとして位置付けていることを継承している点である。さらに、セールはそのデュエムが描いた混合概念の系譜にベルクソンを連れ、その次に自身を位置付けているのである。

セールが「混合について考えたギリシャ人たち」と述べている通り、古代ギリシャ哲学においては、混合の問題は一つの主題として複数の哲学者によって論じられていた。この問題意識の背景には、形而上学的な観点から物体に関する議論が展開されたギリシャ哲学の特性を見て取ることができるように思う。大きく分けて、ギリシャ哲学における混合をめぐる議論は、原子論者によるもの、ストア派そしてアリストテレスの三つに分けられる。原子論者たちの議論において提起されたのは、二つの原子を混ぜ合わせると果たしてそれは全く別の物質に変化してしまうのか、だとすれば原子を最小の単位として同定することは不可能となるのではないのか、という問題だった。

アリストテレスの思想における混合の問題が論じられるのは、『生成消滅論』においてである。存在の生成と消滅が論じられる『生成消滅論』において、混合の問題は副次的なもののようにも見える。実際に、アリストテレスは、混合というもののそれ自体が実際に存在しているか、ということも問うている。というのも、混合されたものにおいて、混合されたそれぞれの要素が依然として混合物の中に存在し続けているならば、それは混合とはいえず、また混合されたことによってそれぞれの要素が全く消失してしまうのであれば、それは新たなる生成となるか、混合された要素の消滅となるはずだからである。混合物が本当に存在するのであれば、それがそれぞれ生成と消滅とは異なったものでなくてはならない、とアリストテレスは指摘する。それと同時に、あらゆるものがかつては混合されてあったという始原的なカオスを述べるアナクサゴラスの主張に対しては、アリストテレスは、混合がどんな要素間においても成り立つわけではない（例えば四大元素の例から木と火は混合しえず、燃焼が起こるだけだ、ということがあげられている）と反論している。また、混合されるものが混合される以前は、別々なものとして区別可能な仕方では存在しているからこそ、それらが混ぜ合わされるのであるから、それらが渾然一体となっているカオスにおいては混合ということ自体が言いえないのではないかと疑問を呈している。

以上を踏まえ、アリストテレスは混合の問題に関して次のように結論づける。

しかし、存在するものと言っても、そのあるものは可能的にそうであり、またあるものは、現実的にそうなのであるから、混合させられた要素も、意味いかなではあることもあらぬことも可能である。つまりそれは現実的には、それら要素から構成されて生じたものはそれらとは異なったものであるが、だが可能的には、それぞれの要素は、なお混合される以前にそれがあつたままの姿であるからで、かくて混合された要素は滅びてしまうことなしに存在しうるからである。(…) 混合されているものは、それ以前にすでに離れてあるものから構成されており、同時に再び切り離されることが可能である、ということとは明らかである¹⁶。

存在は混合の操作において現実的なあり方から可能的なあり方へと移行し、なおかつ混合されたものは再び分離可能であることから、この移行は可逆的な操作であることが言われていることが指摘される。さらに、アリストテレスは、この混合が知覚に関する問題なのか、と問うていることにも言及しておきたい。というのも、混合が私たちの知覚では感知しえないほどに、諸要素が微細に並置されて存在し続けていることに過ぎないのであるとするならば、論じられているのは混合という存在の問題ではなく、知覚の限界の問題になるからである。

このように知覚と混合の問題が孕むパラドックスに言及しつつ、アリストテレスは、議論を混合される要素の条件へと移していく。混合においては、混合される諸要素が相互に材料としての均衡を保たなくてはならない。そうでなくては、混合は優位なものへの変質となってしまうからである。ここで、混合というのが要素間の均衡の保たれた「中間的なもの」でなくてはならないことが指摘されている。つまり、相互的な均衡が保たれる対立的な要素間においてのみ、混合は成立する。さらに、作用を受けやすい要素（例えば液体）においてはさらに混合は

容易に生じる、とアリストテレスは指摘する。

最終的には、アリストテレスは、混合が生じて混合物が成立することを肯定し、「混合とは、混合されうるもの同士が互いに質的变化を受けることによって生じた、それらのものの一体化なのである」¹⁷と結論づける。

ここでセールにおける混合概念の展開に関連して、重要な点として次の三点が挙げられる。アリストテレスにおいては、混合が生成と消滅とは異なるものとして問題提起されていること、そして混合される要素の再分離可能性あるいは混合の可逆性が指摘されていること、最後に知覚と混合の問題とが言及されていることである。

アリストテレスののち、セールは混合をめぐる議論の継承者を一気に19世紀のデュエムへと飛躍させている。デュエムは1902年に発表した『混合物と化学的化合』¹⁸においてエピステモロジーの領域からこの混合の問題について論じているのだが、混合物の概念の立脚点はこのギリシャにおける議論である。そして、その議論もアリストテレスを振り返ったのちに、一気に17世紀へと飛んでいる。デュエムはアリストテレス以降の混合の問題は哲学から化学と物理へとその議論の場を移したとしている。

デュエムはギリシャ哲学を出発点としつつ、エピステモロジーの文脈で混合体の概念を論じる。デュエムはギリシャにおける混合体の議論を原子論者と、前述したアリストテレス的思想との対立に集約させる。アリストテレスの立場は、前述の通り混合の存在を肯定するものである一方で、原子論者たちは、混合の存在を認めず、それはあくまでも要素が並置された状態にすぎず、私たちの知覚に限界があるので、そのような状態を識別できないとする立場である。そして、17世紀から18世紀までの物理理論は、原子論者的な立場に依拠したものとしてエピクロス派からデカルトを経てニュートンへと受け継がれて行った。世界を構成する最も根源的なものは何か、という問いに対する答えは、デカルト、ニュートンにおいて変化しつつも、それらの構成要素が混ざり合い、混合という状態に移行すること自体は、彼らの理論においては受け入れられることはなかったのである。しかし、ニュートンの唯一にして絶対に思われた原理に立脚した物理学の発展の一方で、18世紀にはシュタールをはじめとするドイツ経験主義化学者たちが、デカルトたち機械物理論者が論じてきた固体ではなく、流体を対象として論じ始めたことによって、混合物の存在を認めるアリストテレス主義の復活が準備される。そして、ラヴォアジエの登場による化学革命とともに、近代化学への移行が生じると、原子論的な観念の元における混合の存在を肯定する化学の立場に強固な理論的裏付けがなされるようになる。それを後押ししたのはラヴォアジエによる元素の発見と、その化合の理論である。この発見によって、化学的化合物と物理的混合物は区別されることになる。

元素のメカニズムの解明とともに現代化学は発展し、最終的に理論は再び原子の問題へと戻ってくるとデュエムは指摘している。化学は元素の探求の結果として原子に再会するのである。ここにきて、化学は再び、原子論者的な混合を否定する立場とアリストテレス的な立場のいずれを選択するのかを再び問われることになる。ほぼ時を同じくして一度は混合の問題に関して分かたれた物理学と化学が再び合流する。それは、全く新しい熱力学の原理の発見とその発展に伴って、化学反応におけるエネルギーの変化を熱力学的に考察することでなされた。したがって、化学的化合物と物理的混合物も再び合流するのである。デュエムは、この合流にお

いて、化学と物理の複数の原理が乱立し、物質を一つの原理の元で説明しることができない状況が生じたことで、再び問題となるのは、アリストテレス的な混合物なのではないか、と述べている。

デュエムは「今日の物理学は形而上学ではない。今日の物理学は、私たちが知覚している対象の内奥の本性と本質を把握するためにその知覚の背後に踏み込むつもりはない」¹⁹のだ、と批判する。そして、この共時的な化学と物理学の複数の原理間の矛盾を形而上学的に解決する必要を示唆しながら、この複数の原理の乱立の結果として宙づりとなった概念として混合を取り上げている。

セールは基本的にこのデュエムの考えを継承しつつ、この流れにベルクソンの思想を挿入することによって混合体の概念に時間論をも含ませようとする。言い換えると、アリストテレスからデュエムへと継承された混合の議論においては、異なる要素が混合されるということは存在論的にありうるのか、という問いが常に問題となっていて、時間の問題は関連づけられてこなかった。これに対し、セールは混合の問題が時間の問題でもあるということを示唆するために、ベルクソンが混合における時間についてすでに言及していたことを指摘するのである。

3.2. 混合体における空間と時間の合流

ベルクソンは『創造的進化』において砂糖と水の混合を比喩として取り上げ「一杯の砂糖水を用意しようとするなら、砂糖が溶けるのをまずは待たねばならない」²⁰と述べている。ベルクソンはこの比喩を混合物に関する比喩というよりは、持続の概念を導入するためのものとして用いているようにも見えるが、セールはここに混合の問題と時間の問題の合流とを読み取っているのである。ベルクソンは次のように続けている。

私が待たなくてはならない時間はもはやあの数学的時間ではない。つまり、物質界の歴史全体を通じ、空間内に一挙に適用された時にそれにまさしくあてがわれるような時間ではないのである。それは私の待ちきれなさに、いわば私に固有な、勝手に伸ばすことも縮めることもできない私における持続のある一部分に一致する。これはもはや思考に由来するものではない、生きられたものである²¹。

したがって、ベルクソンはここで持続の問題を導入している。ここで当然問われるべきなのは、セールの時間論がベルクソンの影響を受けているものかという問題であるが、ベルクソンが述べているような数学的な時間と生氣論的な持続の対立軸による時間論と、セールの時間論は別のものとして区別されなくてはならない。というのも、セールがギリシャ哲学、デュエムの流れにベルクソンを連ねる目的とは、あくまで混合体を物質の混合という次元に時間の問題を挿入することにあると考えるべきではないかと思われるからである。セールの時間論そのものについては、時間論自体がセール思想の中で大きな主題となっているため、本論では深く論じることができない。そのため、本論ではあくまでセールの混合体の概念において空間論と時間

論の合流が見られるという指摘に論をとどめることにしたいが、その上で端的な説明を試み、ベルクソンの時間論との差異化を探るとすると、セールの時間論は、ベルクソンの時間論を時間と持続の二項的性質のものと考えたとすると、全く異なった性質のものと言える。セールの時間論の特性とは、時間を複数性のもとで捉えるところにある。セールにおいては、時間は物質を通過する複数の可逆的な流れの束として最も一般的にモデル化しようということができるようになる。

重要なのは、アリストテレスまでの議論においては、混合体とは生成でも消滅でもない均衡の取れた中間的な存在として論じられていたこと、そしてデュエムにおいては原理の複数性のもとでこの概念の再検討が論じられていたこと、そしてベルクソンを接続することで混合体の概念に時間の次元が開かれたことである。改めてこのことを確認するためにセールの論考に戻ることにしよう。

セールは、改めてデカルト的な合理主義、そして認識論的な立場が混ぜ合わせたものを拒絶していたことを指摘しつつ、混合体が複数の連続的な流体の合流であることを示唆している。

明晰判明な知識は、分割し分離する分析の結果得られるが、この知識はごちゃ混ぜになったものを激しく嫌悪する。分離すること、分割することは一つの空間を前提とし、区別することはその空間の中、あるいはその空間の上の特定の地点に目印をつけることだが、全ては位相論的には単純な作業である。(…) 結び目を解いたり、固定結びのロープを引き延ばしたりすることのできる者は、普通、様々な結び方でロープを結びつけることのできる者を断罪しない。結び方を知っていればほどき方もわかるからだ。ところが認識論は結び目を解くだけで結びつけることは望まず、逆方向の操作である分析的な操作をしか許容しない。切断し、ほどき、差し引き、分割し、微分するのだ。破壊するのである。分析するとは破壊することを意味する。(中略) 認識論は複合 composition を許容することができない。ところが混合 confusion は流体的多様体を増殖させる。そこでは多数のものが投入されて、それらは非離散的であって、連続的な多様体へと変容していくのである²²。

まず指摘すべきなのは、混合体が位相論的なものであると同時に、流体的なものであることである。近代的な合理主義はあくまで空間と時間を異なる問題系に属するものとして区別して捉えて来たのであるが、セールはこれに対し、混合体の概念を提示することでこの両者を連続的な多様体として合流させようとしているのではないだろうか。

私たちは再び混合と多様性の概念に戻ってくる。それらは諸感覚による豊かで複雑で生き生きとした経験がゆえに直接的で、矛盾を含まず、分析という単純で逆方向の操作よりも抽象的である。(…) 混合は一つの空間とそれに隣接するいくつもの空間の系列 séries を前提としている。それは人が考えているほどには空間と隔たつてはいない時間につながっているのだ。混合物は時間を記録し、保存し、積算する²³。

空間と可逆的な時間を複数の多様体として合流させる束という混合体の概念から身体を理解しようとするこのセールの身体論に対して、身体がこれらの流れが合流する一時的で偶然的な結節点にすぎないものであるのではないかと、という問いが当然のことながら提起されるのではないかと考えられる。言い換えると、身体は複数のネットワークの結節点としか説明されえないのであって、身体の自己同一性の問題は、議論されないままになっているのではないかと、ということが問われるのではないと思われる。この問いに対する検討はまた別の機会に行うことにしたい。とはいえ、指摘しておきたいこととしては、混合体において身体が複数の時間の流体の流れを記録し保存することがセールにおいては示唆されているという点である。一般的にセールに影響を受けたネットワーク理論においてはネットワークの任意の一結節点である主体の主体性あるいは個性は背景に追いやられ、あまり論じられることがないが²⁴、実際にはセールは身体における複数性を強調しつつも、その自己同一性に常に言及していた。たとえば、『干渉』では物体に記録された歴史の問題をデカルト的科学哲学が捨象してきたことを批判しつつ、物体に刻み込まれた歴史性について言及している²⁵。ネットワークの一員であるところの物体における歴史性が担保されるのであれば、身体においても議論は同様である。セールは入れ墨や地図の比喩を用いながら²⁶、複数の流れの合流である位相論的な連続体として身体を捉えながらも、その流れの痕跡が常に身体に刻み込まれて保存され、それが身体の自己同一性をなすことを示唆してもいる、と指摘することで本論では議論をとどめることにしたい。

グラスの水に砂糖が自然に溶けるのを待つようにとベルクソンは述べているが、(中略)このような明確な事実に接して、人はなぜ物体同士の混合あるいは融合を時間そのものと直接的に結び付けなかったのだろうか。とはいえ、二つの流体の成分が一緒にグラスに注がれていたことは事実だ。ベルクソンはデュエムの後を受けて、ギリシャ人の取水口が複数ある水時計、可変式の水瓶、底の通じ合った壺の改良作を考案しようとしたのだ。まさしく、もしくは巧妙にも、彼は混合を実践していたのだ。(…)明瞭判明な認識は、空間を提示しあるいは表象する。錯雑した意識は流れる時間に沿って行ったり戻ったりする²⁷。

混合体は明瞭判明な認識を一般化するものであって、セールにおいては錯雑した意識は認識階梯の下位に位置付けられるというよりも、むしろ明瞭判明なものより一般的なものとして扱われる。明瞭判明な認識が不連続な空間論に依拠し、空間と時間とを区別するのに対して、セールが現実が生じている状況であるとするのは複数の空間が隣接することによって空間と時間とが連続する混合体である。

結論

本論では、セールにおける混合体の概念が批判し、また継承する思想的な文脈について検討することを試みた。セールにおいては、混合体の概念は、位相幾何学の導入によって空間を連

続的な多様体として捉えることを可能にするものであり、また空間と時間との区別を取り払い複数の流体の束というモデルを提示する概念となっている。これまで一般的なものとして扱われてきたものを特殊化するこの転倒によって、混合体は最も現実的な状況に即した概念として提示される。そして、私たちが実際に生きる身体はこの混合体の概念を最もよく表しているものの一つとして理解されると言えるのである。

¹ 例えば、Ian Tucker, "Sense and the Limits of Knowledge Bodily Connection in the Work of Serres", *Theory, Culture & Society*, vol.28, Yorkshire, Sage Publications, 2008, pp. 149-160.

² 先行研究においては、セールの混合体の問題に関して主題的に論じた研究はまだほとんどない。混合体について言及している数少ない先行研究の中で、Maria Assad は混合の問題をセールの他の概念との関連の中で論じており、多 multiple の概念と第三項排除、そして混合の概念の関連づけが行なう。Assad は初期の思想における multiple の概念をセール思想の中心に位置付け、そのヴァリエーションとして第三項排除と混合の問題を捉えている。また、Assad はドゥルーズとセールを対比し、ドゥルーズの襲におけるねじれの問題とセールの第三項の問題の近似性を指摘している。とはいえ、混合の概念の内実については十分な言及はなされていない。また、Geneviève James はセールのサラジューヌ論と関連付けながら corps mêlés について論じているが、corps を身体と捉え、混合体を両性具有の身体として読解している側面が強い。しかし、これに対して本論が主張するのは、corps とはむしろアリストテレスからデュエムの流れで考えら得るべきものであり、化学用語で言われるような単体 corps simple のヴァリエーションとも言えるようなものであること、corps mêlés とは混合がなされている諸物体を記述するものであるとして捉えるべきである、ということである。もし、corps が身体を示しているのであれば、混ぜ合わされた諸身体が意味する複数性が示すものが不可解のままにとどまってしまうからである (Maria Assad, "Ulyssean Trajectories: A (New) Look at Michel Serres's Topology of Time", *Time and History in Deleuze and Serres*, ed. by Bernard Herzogenrath, London, Bloomsbury, 2012, pp. 85-102., Geneviève James, "Le « corps mêlé » de Michel Serres", *LittéRealité : une revue d'écrits originaux et de critique*, vol. 3, N°1, Tronto, LittéRealité Publication, 1991, pp. 44-54)。

³ Michel Serres, *Hermès II, L'interférence*, Paris, Minuit, 1972, p.9-17.

なお、この箇所には「干渉」では引用元は示されていないものの、セールは、ライブニッツが学問について述べている以下の箇所を引用しているものと思われる。セールはこの箇所で、以下のように、

les sciences en sont venue à un état que Leibniz décrivait... « corps continu comme une océan »

現代科学の状況を評して「大洋のごとき連続体」と述べているが、引用元であると思われるライブニッツの断章では、

Le corps entire des sciences peut estre considéré comme l'océan, qui est continué partout, et sans interruption ou partage, bien que les homme y conçoivent des parties, et leur donnent des noms selon leur commodiré.

となっており、連続体と明確に言及されているわけではないことを指摘しておきたい。

(G.W. Leibniz, *De l'Horizon de la Doctrine humaine et Αποκατάστασις πάντων (La Restitution*

universelle), textes édités, traduits et annotés par Michel Fichant, Paris, Vrin, 1991, p. 35, LH IV, 8, 25, (94-95).

4 この原理の複数性についてはバシュラールにおいてすでに意識され、理論的準備がなされていた、ということはセールにおいてもすでに指摘されていて、それに関しては例えば、『コミュニケーション』所収の「構造と輸入——数学から神話へ」で言及されている (Cf. Michel Serres, *Hermès I, La communication*, Paris, Minuit, 1969, pp. 21-37)。

5 Michel Serres, *Hermès IV, La distribution*, Paris, Minuit, 1977, p. 13.

6 セールは言語が介在しない純粹な感覚与件を「恩寵 *grâce*」と呼んでいるが、この「恩寵」は実際には私たちが感じるができないものである。感覚与件は常に、言語による認識の余剰として知覚され、遡及的に把握されることしかないとされる (Cf. Michel Serres, *Les Cinq Sens*, Paris, Grasset, 1985, p. 217-239)。

7 Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience* (1889) in *Œuvres*, Paris, P.U.F., 1959, pp.58-62.

8 Cf. 池田真治「ライプニッツの無限論と「連続体の迷宮」」『哲学論叢』第31号, 2004年, pp. 37-51.

9 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 79.

10 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 80.

11 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 81.

12 idem

13 『五感』における章立てについては、先行研究においても明確な意味づけが未だ行われているとは言えない状況にある。とは言え、明白であるのは、5章立てになっている『五感』の各章が五感の諸感覚をそれぞれ論じている訳ではない、という点である。本論においては、混合体の概念に対するより集中的な言及がなされている箇所として、第1章と第3章の該当箇所を取り上げた。特に第3章は、先行研究では言及されることがあまりない箇所ではあるが、集団と主体の媒介としての感覚と身体という点から混合体を論じている点で重要であると思われる。

14 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 182.

15 特に重要な論点として挙げられるのは、ライプニッツにおける複合実体 *substance composée* とセールにおける混合体がどのような概念的連関を持っているか、という問題である。1980年代以降のセールの著作での混合体 *corps mêlés* あるいは *mélange* という語の使用においては、*composant* あるいは *composer* という語が極めて近似的な意味合いで用いられていることから、混合体の問題とライプニッツの複合実体の問題にセールが連関を見ていることは明らかなように思われる。そして、序論において、混合体という概念が1980年代に論じられるようになった、と述べたことと、この問題は深い繋がりを持っているように考えられる。このように述べるができる論拠の一つを、1981年に出版された Christiane Fremont の『存在と関係 *L'être et la relation*』にセールが寄せている序文に見て取ることができる。『存在と関係』はライプニッツのデ・ボス宛書簡のフランス語訳とそれに対する Fremont の論考から成り立っており、Fremont はその論考で、実体的紐帯 *vinculum substantiale* という概念を重要な概念として取り上げている。問題となっているのは、モノド相互に実在的な影響関係がないとするならば、複数のモノドの寄せ集めであると同時に一者的な存在である実体的な存在はいかにして成立しうるのか、というパラドックスである。モノド相互のコミュニケーション、あるいは交通がないならば、モノド同士を結びつけ、実体的な存在たらしめているものは何なのか。この時間われているのは、身体と魂とはいかにして結びつき、一者として存在しうるのか、という問題でもある。Fremont は寄せ集められたモノドが実体的存在として成立する上で、実体的紐帯が諸モノドに対する反響 (*echo*) として働くことによって、実在的存在は単なる寄せ集めではな

く一つの存在物として成り立つのだ、としている。このFremontの論考に対し、セールは、彼自身がそれまでライブニッツ思想のシステムにおいて複合的なものを周縁的なものとして捉えていたことが誤りであった、と述べている。そして、ライブニッツ思想における関係 lien と反響 echo の問題の重要性を認めた上で、「複合実体なきライブニッツのシステムとは、最大多数なき数の論理と同じであろう」と述べてもいる。実際のところ、1980年代以前のセールの著作においては、『ヘルメス』を始め『ライブニッツのシステムとその数学的なモデル』までさかのぼっても、複合的なもの、離散的なものの混ざり合った混合体といったような主題はあまり言及されていないように思われる。この時代、セールが重要視していたのは、むしろカオスや複雑性といった共時的科学が初めて科学的対象として取り上げることに成功した問題をどのようにライブニッツにおける一と多の対立における多の問題に組み込むか、という問題ではなかっただろうか。したがって、1980年代を境として、カオスや複雑性といった無秩序な多性の問題とは区別された別の段階がセールの思想に生じている、と考えることができるように思われる。それが、本論で論じた混合体の概念や、あるいはライブニッツ的な複合実体が表しているような、離散的でありつつ一つのまとまりをなす準秩序を持った段階という主題ではないだろうか。したがって、本論ではアリストテレス以降の混合の問題の概念史はデュエムへと接続されたが、そこにある飛躍を混合の問題における断絶とだけ理解すべきではなく、別の形でライブニッツにおいて発展がなされているとセールが捉えていると理解すべきではないかと考えられる。とはいえ、では混合 mêler と複合 composer が実際にセールの思想においてどのように関連づけられ、また区別されるのか、という点については、今後の課題としたい (Cf. Christian Fremont, *L'être et la relation*, Paris, Vrin, 1981)。

16 アリストテレス「生成消滅論」『アリストテレス全集4』戸塚七郎訳 (岩波書店 1968年) p. 297. ここでアリストテレスが名詞の「混合」として用いているのは、*μίξις/mixis* であり、また動詞として用いている *μίγνυμι/mignumi* は *mêler* の語源となるラテン語の動詞 *misceo* と同根である (Cf. Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, Paris, L. Hachette, 1873-1874, entrée « mêler »)。

17 「生成消滅論」、op.cit., p. 298.

18 Pierre Duhem, *Le mixte et la combinaison chimique: essai sur l'évolution d'une idée*, Paris, Naud, 1902, rééd. Paris, Fayard, 1985. この書籍はもともと1902年にLe concours du Centre National des Lettresを通じて出版されたものであったが、1985年にセールによってLa collection Corpus des Œuvres de Philosophie en Langue Françaiseの一環として復刊された。復刊の際にはイザベル・スタンジェールが監修を行なっている。

19 Pierre Duhem, *Le mixte et la combinaison chimique: essai sur l'évolution d'une idée*, op.cit., p184.

20 Henri Bergson, *L'Évolution créatrice* (1907) in Œuvres, Paris, P.U.F., 1959, p. 502.

21 idem

22 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 181.

23 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 182.

24 アクターネットワーク理論における主体性などに対する批判的な論点をまとめた論文としては、例えば以下の論文が挙げられる。青山征彦「人間と物質のエージェンシーをどう理解するか: エージェンシーをめぐって (2)」駿河台大学論叢 (37), 2008, pp. 125-137.

25 Cf. *Hermès II, L'interférence*, op.cit., pp. 67-127.

26 *Les Cinq Sens*, op.cit., pp. 17-27.

27 *Les Cinq Sens*, op.cit., p. 182.